

# ひとばく 研究員 だより



主任研究員 藤井俊夫さん

近年、地球温暖化や開発による自然環境の悪化により、多数の生物種の急速な絶滅が危惧されるようになり、温暖化や自然環境の悪

化などさまざま指摘されていますが、まだ十分解明されていません。

世界の植物種は、名前がわかっている植物だけで30万種に達すると推定されています。人類の活動が活発になった産業革命以降、絶滅の速度は急速に上昇し、20世紀には1年で数万種の生物が、人知れず絶滅しているといわれています。

絶滅する生物種の保全を目的に編集されているのがレッドデータブックです。

民間の非政府組織（NGO）である国際自然保護機

## 植物の生育環境を守ろう



①人里の代表的な草花で湿った草原に自生するリンドウ ②ヤマラッキョウ。県には図鑑の記載に合わない多数の系統が見つかっており、形態や染色体、DNAから調査研究が進む

構（IUCN）が、1940年代から絶滅の危機にひんした生物種の目録をまとめた。日本では88年に「我が国における保護上重要な植物種の現状」が出版された

のを機に各地で地方版が作成されるようになり、ここでは植物を取り上げて、現状と今後の保全について考えていきたいと思います。

日本には7千種の植物が生息し、固有種は2500種に達するといわれています。そのため世界的に見たホットスポット（生物多様性が高いが、人類による影響によって絶滅の危機にひんする生物が多数生息する地域）の一つに指定されています。植物の絶滅の主な要因として指摘されて

いるのは、温暖化、森林伐採、河川水辺の改修・開発、シカなどの動物による食害、園芸目的の採取などです。

次に絶滅危惧種の環境を見てみると、人里近くの里山、里草地、河川、ため池、二次林、海岸などに集中することがわかってきました。このような場所は人為的影響を受けやすく、開発によって生育地ごと消失することがあります。

近年は、開発地で絶滅危惧種が見つかるのと移植などの配慮がされるようになり、移植後の管理に問題があります。その植物に適用しているか、管理は適切に行われるか、また植物は昆虫などによって送受粉をする場合が多いので、地域に送受粉昆虫がいないと子孫を残せなくなり、やがて絶滅してしまうこととなります。

このようなことを回避するためにも地域の生き証人としての重要性を十分に認識し、現場での生育環境の保全を最優先に考えることが重要だと考えています。